1. はじめに

12 月に入ると、街中はクリスマスのイルミネーションなどの装飾によって、クリスマスの雰囲気が漂う。12 月に入るとすぐに最終試験が実施され、その後休暇となる。年末の哀愁漂う英国での生活を含めて、12 月の学習面、生活面について報告する。

2. 学習面

12 月は最終試験があり、合否によって次のコースに行けるか否かが決まる。reading, listening, writing, speaking の 4 技能があり、一つでも合格点に達しないと不合格となり、再試が実施される。無事に試験を合格することが出来たが、10 月上旬には考えられない結果に少しばかりの驚きがある。

思い返せば、10 月上旬の初めての授業でクラスメイトが自分よりもはるかに英語が堪能であり、会話の最中に自分の不甲斐なさを痛感していた。今よりもレベルの低いクラスに移動することも考えたが、今思えばクラスメイトが自分よりも英語が堪能なのは すごく恵まれた環境である。同じような能力の人たちに囲まれたり、もしくは周りよりも優れていると感じる環境に身を置くことは安心感や優越感においては良いかもしれないが、十二分な成長は期待できない。1 週目の担当の先生との面談の際に「このクラスで頑張る」と決意した自分が誇らしい。

おそらく、留学に限らず生きている限り、身の丈に合っていないなどと不安に思う場面があると思うが、如何なる時も置かれた場所で最善を尽くしたい。仮に結果が思い通りに行かなかった場合も、最善を尽くしたならば後悔はないだろう。

3. 生活面

最終試験も無事に終わり、冬期休暇では欧州諸国を北欧から南欧にかけて順番に巡りたいと思っていたが、コロナウイルスの状況を踏まえて、国を絞っての旅行にした。

まずはフィンランドにオーロラ鑑賞に行った。雲などの影響によって 5 日間で一回しか見ることは出来なかった。北欧は高緯度のため、冬場は日照時間が極端に短い。しかし、日中に田舎の薄暗い街を散歩したり、サウナに入ったりするなどして、日本では体験できないであろう、ゆったりとした時間を楽しむことが出来た。

図 1　オーロラ

オーロラが鑑賞出来たのは最終日のみで、それ以外の日は空一面に雲がかかり、鑑賞することが出来なかった。図 1 のオーロラは多少の雲があるが、オーロラの光の強さは十分なように思われる。しかし、実際はというと肉眼で鑑賞することは出来ず、カメラの設定において、F 値を最小、ISO を 1000 から 1600 の間、そしてシャッタースピードを約 10 秒にすることによって、図 1 のような画像を撮ることが出来た。

日本ではテレビや SNS などによって多くの人がオーロラを認知しているが、多くの人が想像する程度のオーロラはおそらく、宝くじに当たるぐらいの運を持っていないと見れないのであろう。

北欧は想像していたよりも暖かく感じたが、夜にオーロラを鑑賞しようと試みていた時は、靴下を数枚重ね履きしていたが、足のつま先が凍死するのではないかと思うぐらい北欧の氷点下は辛かった。近い将来、寒さの恐怖心を忘れかつコロナウイルスが収まった際に、再度訪れたい。

フィンランドの次はフランスを訪れた。EU 圏内ということもあり、飛行機は国内線感覚で乗ることが出来た。オミクロン株が感染拡大する前ということもあり、ルーブル美術館やエッフェル塔などは気軽に行くことが出来た。エッフェル塔は東京タワーやスカイツリーのように、有名であり、ある程度の想像は出来るが、実際に近くでエッフェル塔を見たときは東京タワーなどでは感じなかった、芸術性を感じた。セーヌ川沿いを歩いていき、徐々に見えてくるエッフェル塔は街並みと違和感なく融合していた。

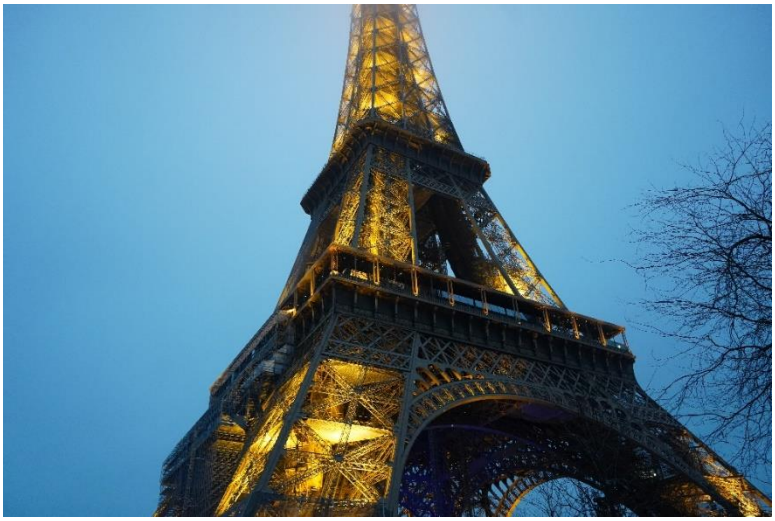

図 2　エッフェル塔

その後はクリスマスや年越しを欧米諸国で過ごしたいと思っていたが、オミクロン株の影響を考慮して、クリスマス前に英国に帰国した。英国では、年が明けると至る所で花火が打ち上っていた。

フィンランド、フランスともに英語を公用語としない国だが、英語だけで十分に過ごすことが出来た。フィンランドでは SIM カードを購入していないので、道を現地の人に聞いたり、オーロラの情報を英語で聞くと、9 割近くの人が当然の如く英語で受け答えをしてくれた。日本ではおそらく、海外から来た人が同様に英語で質問しても、同じようには行かないだろう。

フランスでは英語を話せるが、積極的には話そうとはしないという話を聞いたことがあったが、現地の人も含めてそのような人は見受けられなかった。しかし、フランスの人は絶対に「sorry」と言わないことに気付いた。人とすれ違い時に避けようとするが同じ方向になった時、狭いスペースで荷物が当たった時、全員が言わなかった。AirFrance の航空会社を利用した際に、CA も同様な感じだったので、英国とフランスの国民性の違いを顕著に感じることが出来た。

日本は治安が世界一と言われており、たしかに欧米諸国などと比較するとなんて安全な国なのかと感心する。フランスからロンドンに帰国する際に、空港で助けてほしいとのことで了承したことがあった。その人は手荷物超過の罰金を支払おうとしていたが、クレジットカードをスーツケースの中に入れており、既に預けてしまったため、払えないとのことだった。そのため、€50 を現金で渡すので、€49 をクレジットカードで代わりに払って欲しいと言われた。しかし、罰金支払いの画面はクレジットカードを挿入してくださいとの記入のみで、€49 とはどこにも書かれいなかった。いきなりの出来事と、フライトまでの時間が残り僅かだったこともあり、その人を信用してクレジットカードで代わりに支払った。しかし、上限金額の関係でクレジットカードを使用できなかった。

この話をすると多くの人がそれは詐欺だと思い込むが、その真偽は分からない。その人は本当に困っているように思えたので、信用した自分に後悔などはない。瞬時に人を善人か悪人かを見分けるのは難しく、近い将来に悪人と出逢い、詐欺にあうかもしれない。しかし、どうせ騙されるのならば、人を信じで騙されたい。人を疑い、それが正しかった時には自分の直感を誇らしく思うかもしれないが、仮にその人が善人であった時には後悔の念に駆られるだろう。人を見た目などで悪人と決めつけるのは決して良くない。

その点日本は誰しもが快適にかつ安全に過ごすことが出来る。将来、海外で働く際には、日本の良さを一人でも多くの人に伝えたい。

4. おわりに

残りの留学生活も少なくなり、日々の時の流れの速さに驚いている。寒いと思っていた英国の冬もフィンランドに比べれば、そんなことはない。今の生活に不便さを感じることや、課題などに嫌気を差すこともあるが、これからの人生の中で大変な時期と比べれば、現状は全く問題にすらならないのであろう。ネガティブに物事も捉えてしまうことも多々あるが、せっかくなら何事もポジティブに捉えて残りの留学生活を送る。

以上で 12 月分の月例報告を終了する。